寫偶脫也、○中略鄭風溱洧篇、方秉蕳兮、毛傳蕳蘭也、正義引義疏云、蕳卽蘭香草也、莖葉似澤蘭、廣而長節、藏衣著書中辟白魚、陳藏器云、蘭草生澤畔、葉光潤、陰小紫、別本注云、葉似馬蘭、故名蘭草、蜀本本草云、蘭草葉似澤蘭、尖長有岐、花紅白色而香、生下濕地、輔仁訓布知波加麻允當、

〔類聚名義抄八艸〕蘭音闌　フヂバカマ　アララギ

〔和爾雅七草木〕蘭草蕳、水香、燕尾草、孩兒菊、香金草並同、フヂバカマ　アラヽギ

〔東雅十五草卉〕蘭フヂバカマ○中略　漢にして古時蘭といひしものは、卽此にしてフヂバカマといふものなり、今俗に蘭の字の音をもて呼び、ランといふ者は、漢にして蘭花と云ひて、蘭草とは異なる物也、其說の如きは、李東璧本草に詳に見えたり、フヂバカマといふ義不詳、其花淡紫色、此に藤といふ色に似て、其瓣の筩をなせしが、袴に似たる所あれば、藤袴とはいひしなるべし、猶俗に藁の袴などあるが如しが

〔古今要覽稿草木〕ふぢばかま　らに　蘭

ふぢばかま一名らにハ、漢名を蘭、一名蕳、一名蘭草、一名香蘭、一名王者香、一名國香、一名秋蘭、一名蘭澤、一名大澤蘭、一名幽蘭、一名香水蘭、一名燕尾香、一名紫菊、一名孩兒菊、一名待女花といふ、此草古より諸國に野生多し、春舊根より苗を生じ叢をなし、夏を經て莖高さ三五尺に至り、秋をむかへて每枝傘狀をなし、細小なる淡紫花を攢簇す、此卽劉蒙がいはゆる孩兒菊花如紫茸叢苗細碎菊譜といへるものなり、又一種蘇敬注に、蘭澤八月花白證類本草引唐本草といへるものも、稀に野生ありといへども、保昇のいはゆる花紅白色證類本草引蜀本圖經のものハ、いまだこれある事をきかず、其葉は山蘭に似て、綠色にして末尖り細鋸齒あり、又岐ありて燕尾の如きものも、一莖の內にハ多く相交りて、さらに山蘭樣の物のみにあらず、此葉生なる時ハ香氣薄けれど、莖葉を連ねとりて、室中に掛をき、日をへて乾枯すれバ、その香氣殊によし、さて皇朝にて蘭の物にみへたるハ、忍坂大中姫